宮城県水産高等学校

愛媛県の皆さまからのご支援に御礼申し上げます

宮城県水産高等学校　教諭　瀧村　達也

まず初めに、愛媛県の皆さまには、私たち宮城県水産高等学校の修学旅行に際し、多大なご支援をいただいたことにあらためて深く感謝申し上げます。

私たちの住む宮城県石巻市は県内でも最も東側、言い換えれば「果て」と言っても過言ではない場所にございます。東北一の大都市、仙台に比べれば「都会」ではなく、むしろ「いなか」です。しかし、水産業が盛んで、海、山、川など、自然と共にゆったりとした時間が流れるよい町です。ひょっとすれば愛媛県にも石巻と同様な町があるのではないでしょうか。石巻はそのような町でした。

震災時の話に移ります。皆さまはあの地震が起きた際、どのように過ごされていたのでしょうか。テレビに速報が流れ、「東北ですごい地震が起きたらしいよ」というぐらいの認識だったのではないでしょうか。私たちは当然ですが、そのテレビ画面の中にいた人間です。今までに経験したことのない揺れが、今までに経験したことのない長い時間続きました。私は「人はこうして死んでいくのか…」と思いながら揺れが収まるのを待ちました。ライフラインが途絶え、何が起きているのか、この高度な情報化社会の世界で、今何が起きているのか分からない…。ラジオからも、町の防災無線からもけたたましいサイレンと共に「大津波警報！」。それでもあの惨状になるであろうことを予想するのは無理でした。私があの惨状の一端を知ったのはその日の夜、カーナビでの津波の映像でした。「なるほど。こういうことだったのか…」すべてを悟りました。その後はみなさんもテレビでご覧になった状態でした。「壊滅」という言葉の本意を知りました。

本校も被災し、内陸部の仮設校舎に移転となりました。本校は実業高校、ましてや水産高校ですので、海辺から離れての授業は困難を極めました。「宇和島水産高校が山の中にある」…このような感じでしょうか。

毎日が自転車操業のように過ぎていったある日、「愛媛県から修学旅行の支援がある」という話が舞い込んできました。当初は「ウソだ！そんなすごい話あるわけない！」と耳を疑いました。疑ってしまって申し訳ありません。私たちは藁にもすがる思いで応募させていただきました。

当日、私たちが松山空港で目にしたのは、「歓迎　ようこそ愛媛県へ　宮城県水産高等学校ご一行様」の大きな横断幕でした。宇和島でも市長様から挨拶をいただき、観光協会様からは「牛鬼」での歓迎行事、宇和島水産高等学校での交流会、みかん狩りなど、素朴で心温まるおもてなしをいただきました。昨今の修学旅行といえば、テーマパーク等の施設で遊ぶといったものが多く、本校もその類でした。しかしこの修学旅行は「人と人とのふ

れあい」「人情」「あたたかさ」など心に響くものばかりでした。本音を言えば、あと 1 日皆さんとふれあう時間があればと思いました。本当に感謝申し上げます。最後になりましたが、皆さんのご健康、ご多幸を祈念いたします。

追伸　「紅まどんな」の食感、おいしさが今でも記憶に残っています！

がんばろう!水高!